

◇研究助手報告◇

成実論 覚え書き

神谷 静 治

成実論についての研究は従来からなされているとは言え、経量部学説に対する積極的な資料として取り扱った研究は多いとは言えないのではないだろうか。それに対して中観思想又は「中論」との関係論を論じた論文が注意されるべきであり、近年では桂紹隆氏が詳しく論じられている。成実論を経量部説として論じたユニークな論文をここで紹介したい。論文の著者は中国人学者で著名な呂澂氏で論文の題名は「略述経部学」（現代仏学 一九五五年 十二期）で比較的短い論稿である。呂澂氏は陳那の著者で仏教論理学の基本書とも言われる。集量論々に対する論究もあり、仏教論理学の知識は豊富と思われる。近年、呂澂氏のインド、中国についての論文が各々二冊として上梓された。この紹介する論文もインドの部に収められている。なお、この論文は又、現代仏教学術叢刊95に所載されている。

この論文を取り上げる理由は二つある。

(一) 梶山博士が世親を主に簡明に記述された経量部学説の論文「存在と知識—仏教哲学諸派の論争—(二) 経量部の根本的立場」（哲学研究第五〇五号）を補う論文、少くともその一つと思われる。呂澂氏は主に世親以前を論じている。

(二) 成実論を経量部学説の中に位置づけている。

以上の二点である。

次に論文の構成を述べよる次のごとくである。（記述すれば最も適切であるが紙数が重なる故、あしからず）ページ数は叢刊に依り、章とその題名は私の見方である。

序 (p 123)

一章 経部の名称とその典拠 (p p 123 ~ 124)

二章 経部形成過程について (p p 124 ~ 127)

三章 経部前期（譬喩者）の学説 (p p 128 ~ 130)

四章 経部本宗（シュリーラタ）の学説 (p p 130 ~ 137)

五章 経部後期の学説 (p p 137 ~ 138)

成実論は主に、三章で記述されている。ただ、この論文の論述の進め方に少々無理がないこともないように思われるが、一つの見解として有益であると思われる。

次に成実論のテキストについて簡単にふれてみたい。このテキスト（漢訳）は従来

よりかなり複雑な過程を経ているようで現在の形になるまでには相当な改訂等を経ているものと言われている。羅什の訳書では、その最後に位置し、訳出年代と羅什の卒年が微妙にからんでいる。それで、訳経に対する取り扱いが重要な課題となってくる。訳経について、その重要性をつとに指摘されるのは比較的、西欧の研究者とみえるのは私の偏見であるうか（たとえば、ドゥ・ミユヴィル氏、ドゥ・ヨング氏、ロビンソン氏、ブラフ氏 etc.）。

日本では横超氏等のすぐれた研究も発表されている。近年、中国人研究者、曹仕邦氏が別の見方からすぐれた成果を提出した。すなわち、「論中国仏教訳場之訳経方式与程序」（新亞学報、5巻2号一九六三年）で専門家による訳（日本語）が切に望まれる。曹氏は、これ以前にもすぐれた論文を提出している。すなわち、「論西漢迄南北朝河西開發与儒学釈教之進展」（新亞学報5巻1号一九六〇年）で、これにはヒュルスクエ氏のすぐれたレジュメがある。

成実論に対しては、遠回りではあるが訳経に対する知識を十分な前提として進めることが必要であると思われる。

テキストの列挙（ただし、全くの暫定で、不完全であることをおことわりしておきたい）

(一) 大正大蔵経 32巻 №一六四六

(二) 敦煌本

(イ) スタイン本

ジャイルズのカタログによれば六つ存在する。（全てスタイン番号）
 (1) 三一〇八 (2) 一四二七 (3) 一五四七 (4) 一三二四 (5) 一三〇〇 (6) 六七九
 八に含まれている（ジャイルズ四三三四番）。

この中、(2)・(3)は藤枝晃氏によって紹介されている。

「墨美」119号

(4)は福原亮蔵氏「成実論の研究」に記載されていない。

(ii) ペリオ本

ペリオ蒐集中の北魏敦煌写本

「成実論」巻八残巻（№二一七九）

日付 延昌三年（A・D 514年）

次をも参照されたい。

「墨美」№156

“Récentes travaux sur ‘Touen-Houang’”

ドゥ・ミユヴィル氏 通報56号 p p 27 ~ 28

(三) 古点本

成実論天長(A・D 824~834)点はもと二十三巻のうち今日十一巻が残存し、そのうち七巻(十一、十三、十四、十六、十八、二十一、二十三)が正倉院聖語蔵に、四巻(十二、十五、十七、二十二)が東大寺図書館に襲蔵されている。全巻同一人による白点が施され、巻十四の巻末に「天長五年(A・D 828年)七月一日一往聴了」の白書がある。(鈴木一男氏、成実論卷二十三天長五年点訳文稿「まへがき」による)

また、東大寺本、巻十二、十七が残っている。

訳出された巻(全て、鈴木一男氏による)

(1) 書院部紀要 六号 巻十一

八号 巻二十二

(2) 奈良学芸大学紀要 四ノ一、巻十三

五ノ一、巻十八

五ノ三、巻十六

十ノ三、巻十四

(3) 南都仏教 三、巻十五

十八、巻二十三

(4) 訓点語と訓点資料 八、巻二十一

(四) サンスクリット本(推定、断片)

宮坂有勝氏の論文「経量部の断片」(印仏研、十巻二号)で成実論のサンスクリットテキストとして推定せるものである。

氏の「はしがき」を要約すれば――

東トルキスタンのキシルの窟院で発見された非常に古い梵策断片で、まだ内容の知られていないものである。材料は貝葉で計一〇葉半(表・裏に書かれている)。(きわめて零細な断簡であって、完全なものはない)。写本全体の分量も不明である。書本の年代判定は西紀一五〇〇〜二〇〇〇年頃である。

次の者が参考となると思われる。

“Sanskrit Wörter der buddhistischen Texte aus den Turlan-Funden”

Göttingen 1973年

II] vol. 17. de Jong 氏の書評参照。

『牟子理惑論』編纂年代攷

稲岡誓純

『牟子理惑論』について、その研究は数多くなされており、特に編纂年代が問題視されている。著者が明確でないゆえに、その編纂年代も、「後漢未成立説」から「晉宋間成立説」のものまで種々の論が出されている。

ここでその代表的なものをあげてみると、梁啓超氏は『牟子理惑論辯偽』において、「晉宋間人偽作説」を唱説している。その論拠として、内容から次の四点を挙げている。

一、沙門の剃頭のこととは桓玄と慧遠の間答と内容が同じである。
二、沙門の赤布と跪坐・起立の礼をしないことは東晉の沙門不敬王者の議論と同じである。

三、輪廻転生を更生と呼ぶことは慧遠当時の流行である。

四、沙門の非行のことは羅什門下を指す。

そしてさらに文体も一論拠として挙げておられる。

この梁啓超氏の見解に対して、周叔迦氏は『梁任公牟子辯偽之商榷』において、『牟子理惑論』の序伝は蒼梧の太守が作るころのもので、三十七篇の本論と後序が牟子の自撰であろうとし、「後漢末の作」としている。

山内晉卿氏は、『支那仏教史之研究』において、「漢魏間の人の手になる」と述べている。その論拠は、

一、後序において「老子道経三十七篇」とあることは、『前漢書』芸文志に「老子伝氏経説三十七篇」とある。

二、沙門赤布のことは、『魏書』積老志に「漢代沙門皆被赤布」とある。

三、第十七篇に「刺殿公之刻楮」とあるが殿公とは後漢明帝の諱を避けたものである。

四、『牟子理惑論』は莊子に及んでいない。

五、道家と辟穀長生の混淆は後漢時代のものである。

六、交州に乱を避けたということと、『後漢書』の註に引用されている江表伝の刺史張津が道教を鼓吹したことと関係がある。

の六点を例挙している。

常盤大定氏は『支那における仏教と儒教道教』において、先の梁啓超氏の考え方を